

## 座談会 ~ 後輩たちへ ~

### 出席者

男子：谷口 清（昭和15年卒）・杉山 信（昭和26年卒）  
古我 和俊（昭和27年卒）・丸谷 統男（昭和30年卒）  
船山 浩志（昭和32年卒）・関山 徹（昭和37年卒）  
安沢 弘之（昭和39年卒）・仙北谷 力（昭和44年卒）  
田口 正人（昭和50年卒）・岡元 哲郎（昭和55年卒）  
女子：好地 陽子（昭和35年卒）旧姓 南波  
堀江 昌枝（昭和46年卒）旧姓 中村  
皆川 里奈（昭和56年卒）  
司会者：赤塚南海男（昭和41年卒）

司会：創部70周年を機会に古いO.B.、O.Gから、若手O.B.、O.G.、現役達に何を継承していくべきか先輩の皆様、いろいろな視点からお話しして頂きたいと思います。

### 早稲田バレーと稲門会への愛着心

船山：稲門会が抱える一番の大きな問題は、若い人の稲門会への帰属意識が、薄くなっていることなんです。我々の頃と違うんですよ。そういう意味では、君達も一緒になって創っていくんだということ伝える貴重なきだと思っんですね。

安沢：総会や幹事会でも、若いO.B.の人達が稲門バレーボール倶楽部にもっと愛着を持って欲しい。現役の応援にどんどん行って欲しい。そういう雰囲気はどうやって作るかということが大きな問題になってますね。

司会：そうです。

杉山：人間科学部に特別選抜制度がありますが、愛校心だとか母校愛だとか、そういうことがここへきて急に薄らいじった。稲門会費の納入にもそれが出ている。もっと制度自体を変えていかないとダメですね。

田口：同期の中にも、他の大学に合格して合宿にも行ったけれど、どうしても早稲田に入ってバレーボールをしたいということで入部してきた者がおりました。

船山：今、一番欠けているのは、早稲田に入ったけれど、自分達は何をしたらいいのかという事が無いということです。その理由は、我々の頃はバレーしか無かったんですが、今はお金させあれば、遊ぶことでも何でも出来ちゃうんです。だから早稲田に入って良かったと思う魅力を作る必要があると思います。日本一になる。世界一を狙うというような、ひとつの大目標があればいい選手が入ってくるかもしれない。早稲田に

入ってオリンピック選手になれるという魅力が出てくれば、それは強くなりますね。

### 哲学を持とう

谷口：今の人には、哲学が無いよな。何のためにバレーボールをやっているのかということ教えなきゃ。昔は個人個人がなぜやるのかということを持っていたよ。今の人にはそれが無いから魅力が無いわけよ。自分は道を極めなくても、人が極めるのを邪魔してはいけないという気持ちがあった。最高学年の時は、後輩を教えないと優勝出来ないから自分の練習よりもそのことを一生懸命にやったよ。教えることで自分も上手くなるし、それが一つの道として残るわけよ。そういうことが、今の人には無いんじゃないのかな。哲学的な物の考え方というものが。

丸谷：私共は実学を谷口さんから教わりましたね。谷口哲学というのがございましたね。だんだんわかるようになって、私も消化できたということでしょうね。

### 親身になって学生と接する

船山：早稲田のバレー部にいて良かったと人に語れるような若い人が少なくなっているのではないかと思います。残念でしょうがない。

谷口：チームの戦力とかでなく、個人的に部員と付き合うO.B.がいてもいいのではないかと思う。

安沢：去年良い結果が出なかった原因の一つは、O.B.と現役のコミュニケーション不足だったんです。

船山：我々の頃は、困ると谷口さんをはじめ、いろんな先輩の所に行きました。

谷口：オレらの時は毎日来たもんな。

丸谷：谷口さんの所へ行くと、トンカツ食べるかもしれない。

船山：谷口さんのところへ行けば、何か得ることがあ

ると思っていたから行ったわけですよ。

谷口：そういう魅力がある0.Bになれよ。みんなが。  
丸谷：私が早稲田に入った頃は、高校の優勝チームのエースの鈴木昭吾さん。そして遠藤さんがいました。

船山：そういう部に入れてもらいたいというのがボクらですよ。球拾いででもいいから入りたいと。だから一生懸命やるんですよ。

古我：一生懸命やっていない者もいたけど。

関山：谷口さんと古我さんは、年がいくつ違うんですか。

古我：ぼくとひと回り違いだね。

関山：谷口さんがおっしゃるように、何かこう親身になって相談できる先輩というのは、現役からみて自分達よりも、ひと回り上ぐらい、10才から20才くらいまでの先輩なんでしょうねえ。

船山：本当はそうでしょうね。そういう人達に頑張っ  
て欲しいです。

関山：忙しい年代だけれども、以前はそういう年齢層の0.Bと現役とのいい関係がありました。

安沢：谷口さんだって忙しい中、後輩の面倒見ていらしたんだから。

谷口：忙しいと言うけれど、オレ余り努力したことないんだよ。自分の好きなことだけ優先してきたから。バレーボールだけ好きだから。オレは後輩達の話しを聞くだけでも勉強になったよ。こちらも得ることがあった。

関山：先輩にとって、後輩が可愛い。後輩から学ぶこともある。この気持が大切ですね。

谷口：ものすごく栄養になったよな。

関山：そうでしょ。その関係がね、薄れちゃってるんですよ。それが今の現役の人達と、ここ20年くらいの0.Bの人達の間がやっぱり薄いんですよ。そこが私、一番心配なんです。

安沢：私が監督の頃、学生に言っていたことは、それぞれ0.Bの方は、バレーボールが違うし、考え方が違うし、いろいろな考え方があると。それをまず全部聞いて、自分で取捨選択しようじゃないかということをお教えました。だから、古い0.Bの方でも入りにくいということはなかったと思います。

谷口：かって明治のラグビー部の北島監督は、“前に行け”としか教えなかった。それで現役は考えるわけだ。どうしたらよいか。そこで今までの歴史の中で、自分のポジションの優秀な先輩のところへ聞きに行くわけよ。こういう時どうしたらいいんですかと。すると、親身に教えるわけよ。それで明治は強かった。

オレ、昔よく言ったんだよ。早稲田のバレー部にはいろいろな考え方があると。就職のた

め、友達がいいから、全日本選手権に出たり、オリンピックに出るためなどバレー部に入る目的はいろいろある。しかし最後はチャンピオンゲームやるんだから、そういう人の邪魔しちゃいけないわけ。早稲田が勝つために邪魔してはいけない。

## バレーボールが好きということ

谷口：オレが大学3年の時、関学を破って全日本で優勝した。その時は皆、バレーボールが好きだったよな。とにかくバレーボールが一番好きだった。みんな、好きの競争をやっているわけよ。バレーボールは人を使うことなんだよ。昔の9人制の場合は、前衛のセンターと中衛のセンターが一番面白かったよ。6人制でもそれはあると思うね。バレーが好きで人間を生まなきゃいけないんだよな。

船山：好きになること、好きにさせることは大切ですね。

谷口：そうなんだよ。それを現役に教えようと思って  
いるんだよ。どうしたら好きになれるか、皆さんとも相談したいと思っていただけです。亡くなった長崎重芳さんも、バレーボールを好きになれよという考え方を持っていたよな。

司会：今の現役見ていると、練習中に選手が互いに、あ  
あしよう、こうしようと話し合っているところを、あまり見ないですね。

谷口：縦割りになっているみたいだな。監督の言う通りやればいいんだと。隣のポジションの選手が  
どういううまさで、どういう特長があるかなんて知らないわけ。それが大切なんだよ。チームでは、それがチームプレーなんだよ。

司会：0.Gの方も出席されているので、女子についても  
お話しして下さい。今の現役の女子は、すごく良くやっていると思うんです。男子と女子が並んで練習しているところを見ると、女子の方がバレーが好きで、勝ちたいという気持ちが出ている  
と思います。

安沢：何でそうなったんですか。

司会：男子が練習終わっても、女子は更にトレーニングも  
やっているんですから。

古我：女子は練習でも試合でも、気持ちが通じるものがある。

丸谷：自分達の目標ということについて話すと、今年は何をやるのか、春のリーグではどう戦うのか、みんな目標を立てて決めたら、先輩の所に相談に行きたんだよ。岡元君達の時どうだった。

岡元：当然そういうことになっていました。練習のための練習ではなくて、試合のための練習  
していました。負けましたけど。

## マネージャーはチームのかなめ

司会：早稲田のマネージャーは、昔から優秀な方がたくさんいてキャプテンの片腕として、部の運営とか、0.Bとのコンタクトなどをやったんですが、最近、マネージャー教育をしないといけないなあと思います。特に男子は、女子はしっかりしてますね。

船山：マネージャーの人選というのは、ものすごく大切ですね。

谷口：だからマネージャーを、どう助けるかなんだよ。バレーボールは皆そうなんだよ。悪いマネージャーでもいいんだよ。いいマネージャーにすればいいんだよ。

船山：まあ、そういうことですね。

安沢：いなけりゃいけないで、どうやったら勝てるか、考えればいいんですからね。

谷口：そうだよ。そうなんだよ。

船山：マネージャーを育てればいいんですよ。直近の0.Bが育てるのが一番いいんですよ。若い連中がね。

谷口：若い連中よりも、現役がバレーボールをどう考えるかということ、ちゃんと教えてやらないといかんだよ。なぜバレーボールやっているのかを。女子はいくらか知っているの。

## 互いに違う部分を学ぶ

安沢：女子がいい雰囲気というか練習をやっている理由を、0.Gの間聞かせてください。

皆川：私達の頃とは、比較にならない程、バレーボールが出来る環境にあります。どの0.Gの方もおっしゃるのは、優秀で推薦で入って来る新人も勿論いるけれど、毎年何人かは初めてバレーボールやるだけですけど、何かお手伝いや協力できることがあればやらせて欲しい、ということで入ってくるんです。奉仕の精神というんですか。バレーだけをやるつもりで来た人ばかりでない部員の構成の中で、お互いに何か違う部分を学ぶという気がしています。このことは、どの0.Gの方も、今後も続けていって欲しいと願っていることのひとつなんです。

安沢：好地さん達の頃は、もう全く特別選抜はないし、それこそ素人の集まりでやっていたわけでしょ。

好地：私達は、高校の体育の時間にバレーを経験して、早稲田に入ってもバレーが好きだから何かやりたいということで入部しました。そして、隣りでやっている男子の練習を見て、すいませんちょっと教えてくださいってということで、自分達の方から求めていったという部分が多かった気がします。今は自分から求める前に、全部監

督がいて、コーチがいて与えられた環境の中でやっている。私達の時は何も無いけど、もっと強くなりたい、うまくなりたいと、先輩や男子部の人をお願いしたと思います。コートを確保するにしても、雨の日に体育館を探すのがすごく大変だったし、合宿も男子の先輩に日立多賀をお願いして行かせてもらったりとか。今はそれがすごく無いんじゃないかなあって。

杉山：女子の場合は、特別選抜以外の人を下から支えているんですよ。そしてマネージャーがものすごくしっかりしていて、指導力を持ってやっているんですよ。ここいらへんが男子と違うところじゃないかと思います。

皆川：今、男子部のマネージャーに女子がいるんですか。

司会：うん、女性も一人いるね。

皆川：そういうことが始まった時に、すごく違和感を覚えて、何のためのマネージャーなのかと。

安沢：以前は、女性のマネージャーは稲門会の仕事の手伝いをやっていましたね。

船山：受験指導なんかは、女子のマネージャーが非常に良くやってくれていましたね。

丸谷：理屈上は、私は全然違和感を感じないんですけど。女性の良さを出せばいいじゃないですか。

## 自立していない男の子が増加

堀江：私、今のお話聞いていてね。現在中学校の教員やっているんですけど、ここ10年、本当に男の子がどんどん弱くなっているんです。委員会でも、女の子がどんどん主導権を握っちゃうんですね。少子化になって、お母さんが手をかけるせい、本当に自立していない男の子達がどんどん増えているんです。これがそのまま大学生になっていって、特に早稲田に入るような子供は、純粹培養で、あんたは勉強やってなさい、バレーボールやってなさい、あとは何もなくていいのよということまで来ているから、何も出来ない。さあお前達、何かやれって言ってもこれは本当に難しい。女の子は、そういうことなく何でも自分でやる。

安沢：就職も真剣に取り組むしねえ。

堀江：これからは、もっと活発な男の子が入ることを期待するんじゃなくて、もっと弱くなっていく男の子が、どんどん入って来るんじゃないかって考えています。

好地：私も、中学生や高校生と接する機会の多い仕事をしてはいますが、全く同感ですね。自分の意志の無い子がものすごく増えています。本当にこの10年そうです。

### ひたむきさと自主性を

安沢：女子部は、先程からおっしゃっているけれども、特別選抜で入って来る子もいれば、受験戦争で頑張っ入って来る人もいる。そういうものがミックスされて、いい伝統といふかずっと頑張ってきていわけですね。男子は今、特別選抜の学生はどれくらいですか。

船山：7～8割でしょうね。一般の人必らずいますけど。

安沢：それでも少ないですね。いろいろ問題はありますが、良くしなけりゃいけないわけですから。そのためには、若手の0.Bが現役と、コミュニケーションをかわして、もうちょっといろいろな意味で本当に接触をして、学生が自主的に練習を出来るレベルに持っていくしかないと思う。私は、まずそれがとっかかりだろうと思います。

船山：私もそう思います。

安沢：それと、男女に共通することですが、今後受験

制度の関係で、他の大学と比べて、超高校級の選手が各年代、何人も入ることは難しいと思います。その中で、早稲田がどんなバレーであるかということを追求していくと、ひたむきさに尽きると思います。本当にバレーが好きになって、互いに心の底から話せる雰囲気にならないと、ひたむきさが出てこない。

古我：一番いいのは、これじゃいかんと、本人達が気が付いて、こうしようと、どんどんやっていくことなんだけどええ。

司会：最後に、70周年ということで、特に50周年以降の0.B、0.Gの人達が、もっと現役と付き合い、現役の目線に立って、話しを聞いて早稲田の伝統を教えてやって欲しいです。また、これからも、年齢に関係なく、同じ早稲田の仲間として、お互いに話せるような雰囲気をつくっていきたいと思います。



出席者のみなさん(平成13年4月1日 クラブハウスにて)